

久保寺逸彦によるアイヌ語語彙カード

遠藤志保

- 目次
- 1 はじめに — 資料の概要
 - 2 資料の体裁
 - 3 資料の内容
 - 4 主な出典
 - 5 辞典稿との関係
 - 6 まとめ — 語彙カードの特徴
- 引用文献

Key Words 久保寺逸彦 (KUBODERA Itsuhiko)、アイヌ語 (Ainu)、収蔵資料 (Materials)、『アイヌ語・日本語辞典稿』(THE AINU-JAPANESE DICTIONARY)

1 はじめに — 資料の概要

本稿では、北海道博物館が所蔵するアイヌ語関連資料のなかから、アイヌ文化研究にすぐれた業績を遺した久保寺逸彦(1902~1971)の自筆による、アイヌ語語彙カードを取り上げ、その概要と特徴を紹介する。

これらは、久保寺逸彦による『アイヌ語・日本語辞典稿』⁽¹⁾(以下、「辞典稿」)のもとになっている資料のひとつであることが指摘されていた(佐々木 2020: iv-v)ものの、それ以上の整理・分析は進められていなかった。その後、2021年度に辞典稿が北海道博物館に寄贈されたことや、北海道博物館第3回蔵出し展「久保寺逸彦文庫」(2022年11月27日~2023年1月15日)の開催に伴う資料整理のなかで改めて語彙カードの整理・分析を行ったことによって、辞典稿との関連性も含めて新たに明らかになった資料の特徴について紹介するものである。

本稿で取り上げる資料は、旧北海道立アイヌ民族文化研究センターが1996(平成9)年に寄贈を受けた久保寺逸彦の調査研究資料(久保寺逸彦文庫)に含まれる、全4,821枚のカードである。いずれも、大学ノートを裁断したと思われる紙がカードとして使われている⁽²⁾もので、裏表それぞれにアイヌ語やその和訳、用例などが書かれている(後述するとおり、書き込みが確認されない

ものもある)。これらのカードは寄贈時には菓子箱等に入れて保管されていた。寄贈をうけたアイヌ民族文化研究センターでは、保管時における状態を保持するために、カードが入っている箱ごとに1件の資料として登録している。箱に久保寺による名称の表記があった資料については、資料名を久保寺による表記どおりに「宗教儀礼語彙」と付けている。一方、久保寺による表記がない資料については、アイヌ民族文化研究センターにて、その内容から「[アイヌ語の語彙カード1]」「[アイヌ語の語彙カード2]」と資料名を付けている。本稿では、以下、これら3件を総称するときは「語彙カード」と呼ぶ。

なお、久保寺逸彦文庫には、今回取り上げる語彙カードの他にも、カードの形状の資料が5件ある。それぞれ、久保寺逸彦文庫においては[アイヌ口承文芸カード]、[アイヌ植物カード]、[カード・アイヌの葬制]、[日本歴史関連の写真カード]、[16mm字幕カード]と資料名⁽³⁾をつけているが、本稿では、カードの内容や形態、記入方法等の点で、上記の5件は語彙カードとは異なる特徴を持つ一方、語彙カードについては3件がひとまとまりの特徴を持つものと考え本稿の対象とした。

3件の資料概要は、それぞれ以下のとおりである。

1件目は、資料名「宗教儀礼語彙」(久保寺逸彦

遠藤志保：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 北海道博物館所蔵(収蔵資料番号186,324)。遠藤(2022)で概要を紹介している。また、その内容は北海道教育委員会(編・発行)、1992『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書(久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)』及び、久保寺逸彦著 久保寺逸彦著作集4 『アイヌ語・日本語辞典稿』(草風館)にて活字化されている。

(2) 罫線が紺色のカード、罫線が水色のカード、片面には罫線がないカードが見られることから、複数の異なるノートを混ぜて使っている。

(3) 北海道立アイヌ民族文化研究センター(2001:72)

文庫整理番号KD5365、北海道博物館収蔵資料番号178,404)で、紙片の大きさはおよそ14.5×5.5cm、1,719枚のまとまりである。

2件目は、資料名「〔アイヌ語の語彙カード1〕」(久保寺逸彦文庫整理番号KD5366、北海道博物館収蔵資料番号178,406)で、紙片の大きさはおよそ14×3.5～9cm)、1,422枚のまとまりである。

3件目は、資料名「〔アイヌ語の語彙カード2〕」(久保寺逸彦文庫整理番号KD5367、北海道博物館収蔵資料番号178,408)で、紙片の大きさはおよそ14×3.5～9cm、1,660枚のまとまり⁽⁴⁾である。

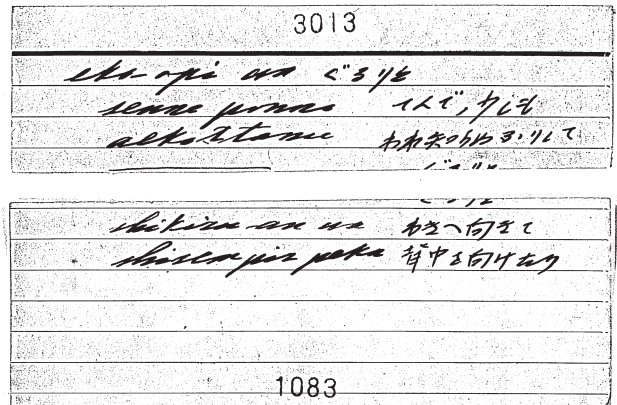
2 資料の体裁

語彙カードは3件とも、基本的に1面につき1項目⁽⁵⁾ずつが記入されている。カードによっては、裏・表にそれぞれ記入されているもの、片面のみに記入されているもの、両面ともに無記入となっているものなど、様々である。無記入の面は、全体の24%ほどある(表1)。

1面につき1項目が基本ではあるが、用例等が長い項目は、カード1面に収まりきらなかったと思しく、2枚に分割されていることもある。そのなかには書かれている行の途中でカードが切られて、文字が分割されている場合もある(画像1～2)。そのため、大学ノートに語彙を書いた後で、一括して現在のサイズに分割したようである。

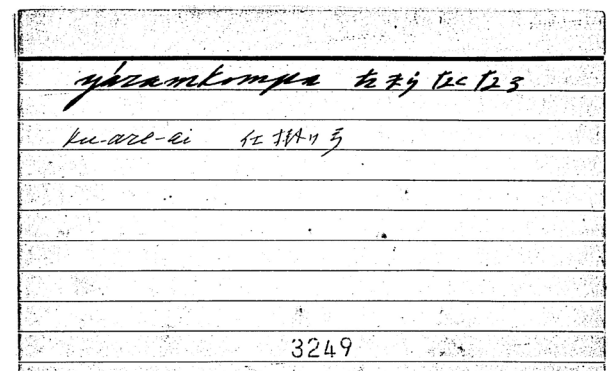
一方で、表と裏とでは、使用している筆記具が異なっていることが多く、天地が逆になっているカードもあることから、大学ノートでは片面だけを記入して、裏面を

記入する場合にはカード状に切断した後で行っていたようである。



画像1～2 1つの語彙が2面にわたっている場合もある (KD5365-3013、KD5365-1083)

また、〔アイヌ語の語彙カード2〕(KD5367)のなかには、縦の長さが他のカードよりも長いものも見られ、その一部は1面につき2項目ずつが書かれている。(画像3)



画像3 1面に2項目が書かれているカード (KD5367-3249)

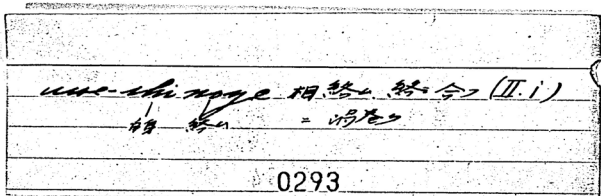
表1 各資料の面数(枚数)

資料名 (資料番号)	カードの表・裏の面数 (a) (カード枚数)	無記入の面数 (b)	語彙の記載を確認できる面数 (a-b)	項目数 (1面に2項目書かれている場合も含む)
「宗教儀礼語彙」 (KD5365)	3,438面 (1,719枚)	851面	2,587面	2,656項目
「〔アイヌ語の語彙カード1〕」 (KD5366)	2,844面 (1,422枚)	556面	2,288面	2,338項目
「〔アイヌ語の語彙カード2〕」 (KD5367)	3,316面 (1,658枚)	860面	2,456面	2,682項目
合計	9,598面 (4,799枚)	2,267面	7,331面	7,676項目

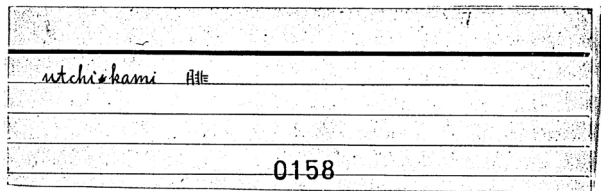
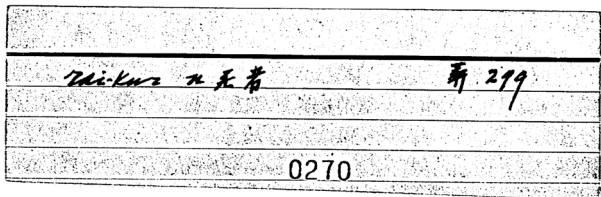
(4) KD5367はカード1,658枚のほか、折り言葉のテキストが記されたB5サイズ原稿用紙(コクヨ20×20字詰)2枚がセットになっているが、本稿ではカードのみを取り上げることとした。カードのカウント等においてもこの用紙は除いている。
 (5) 本稿では、見出し語・用例を問わず、ひとつの語彙についてのアイヌ語及び訳・説明のまとまりをひとつの「項目」として数えた。また、後述のとおり、線で消されている場合についても、ひとつの項目として数えている。ただし、明らかにひとつの語彙の説明・用例であっても、別のカードに分割して書かれていれば、それぞれ別の項目として数えた。

語彙カードの記入には、黒もしくはブルーブラックのインクが使われていることが多いが、赤や藍色、深緑色、薄緑色のインクによって記入されているカードや、鉛筆（黒・赤）によるものもある。また、1枚のカードの中でも異なる筆記具が使われていることもある。最初から2色の使い分けがされている⁽⁶⁾場合もあるが、黒のインクで記入された上から赤の線が引かれているなど、後から書き足されているカードもある。後者からは、語彙カード自体が一度作って終わりではなく、書き足しなどの編集が継続的に行われてきたことが読み取れる。

なお、その筆跡を見ると、久保寺自身の他にも複数の人物が書いたカードも混ざっている⁽⁷⁾。（画像4～6）



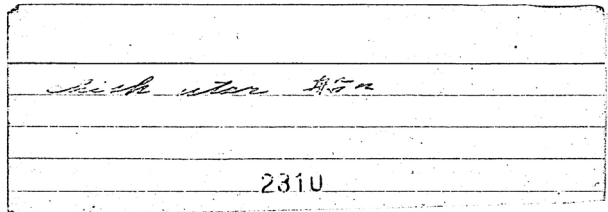
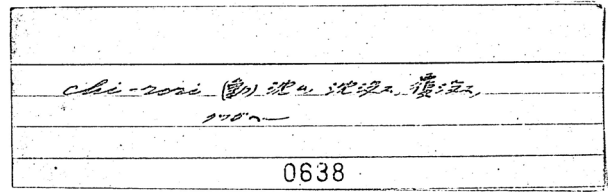
画像4 久保寺による記載と思われるカード (KD5366-0293)



画像5～6 久保寺の筆跡ではないカード (いずれもKD5366)

なお、薄緑色のインクにより記入されている項目は、すべて樺太方言の語彙である⁽⁸⁾（画像7～8）。

このような特定の筆記具で書かれた項目が特定の方言である様子からは、ある特定の出典から語彙を一度にまとめて抽出したことが推測される。



画像7～8 同一の筆記具によって記入されたカードの例。辞典稿によれば、いずれも樺太方言。（いずれもKD5367）

3 資料の内容

本カードの成立については、次のような記述がある。

久保寺逸彦先生は、金田一京助先生の教えをうけはじめた1922年のころから、『北蝦夷古語遺篇』『アイヌ聖典』などの語彙カードをつくりはじめられた。

これに加え『アイヌ叙事詩 ユーカラ研究』の語彙カードやご自身の採録された語彙カードを作製されている。カードといってもそれほど大きな形態のものではなく大学ノートなどを横14～15センチ、縦5センチ程度に切ったものを用いている。

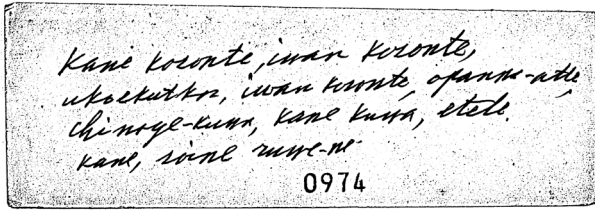
（佐々木 2020：iii-iv）

多くのカードは、アイヌ語の語彙が見出しとなっており、そこに品詞、和訳、用例、形態素分析などが書かれている。なかには、見出し語のみが書かれているカードや、折り言葉や英雄叙事詩の一節などの用例のみが書かれているカードもある（画像9）。

(6) アイヌ語を赤インクで書き、対応する和訳を黒で記入しているというカードがしばしば見られる（たとえばKD5365-0256）。

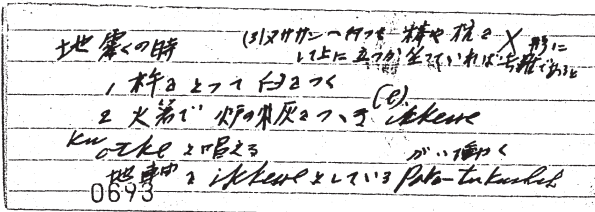
(7) 語彙カードのなかに複数の筆跡が混在している点について、久保寺逸彦の薫陶を受けた佐々木利和氏に語彙カードの筆跡を確認してもらったところ、語彙カードのなかに久保寺以外の筆跡も混ざっており、久保寺はカードを何人かの学生に書かせていたという情報を得られた。なお、語彙カードのみならず、久保寺逸彦文庫（文書資料）のなかには、口承文芸テキストについて複数部の複製が作成されている場合もあるが、このなかには同じテキストが複数の筆跡によって書き写されている場合も確認できる。

(8) 語彙カード自体には方言あるいは出典の記載はないが、辞典稿では同じ語彙について、「樺太」あるいは「樺」という方言の記載がされている。

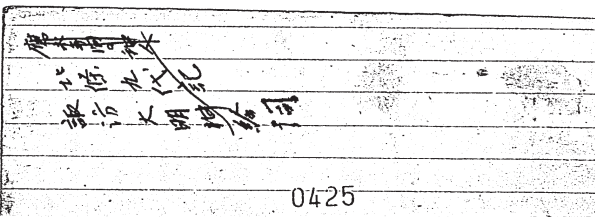


画像9 用例のみが書かれたカード (KD5365-0974)

また、語彙だけではなく、「地震の時」(KD5366-0693。画像10)という見出しが書かれた民俗調査のメモと思しき内容や、「北條九代記／諏訪大明神絵詞」(KD5367-0425。画像11)のような文献メモといったカードも散見される。このなかには、具体的な内容が記述されている場合もあれば、タイトルが記述されているだけのカードもある。



画像10 民俗調査に関わる内容のカード (KD5366-0693)



画像11 書物の題名のみが書かれているカード (KD5367-0425)

語彙カードでは、同じ語彙が複数のカードに書かれていることがある。これは複数の出典から、それぞれ抜き出したためではないかと推測される。

なお、辞典稿でも同様に、同じ見出し語が2回立項されている場合もある。たとえば、

echanchanke 消え失せる。
 echanchanke 消えうすれてゆく。消えてあとなし。
 (ともに165ページ)

のように、同音異義語ではなく、同一の語彙について複数の見出し語として立項されている場合もある。これは、それぞれ語彙カードの

echanchake 消エウスレ行ク (KD5367-0113)
 echanchanke 消エテアトナシ / usa ne kusu, —
 (KD5365-3073)

という2枚のカードを統合した項目と、

echanchanke 消え失せる (KD5367-1358)

がそのまま反映された項目であると考えられる。そのため、辞典稿に同じ語彙が複数の項目として記載されているのは、そのもとになった語彙カードに同じ語彙が複数枚含まれているからだと推測できる。

語彙カードの並び順としては、ある程度、同じ単語やアルファベット順に近い語彙が固まっている個所もあるが、全体としては、特に何らかの順序でまとめているということはないようである。

4 主な出典

1) 辞典稿と共通するもの

語彙カードに記載されている見出し語や和訳、用例については、必ずしも出典が記載されているわけではないが、中には略号を用いて出典や地名、文法事項などが示されている項目もある。

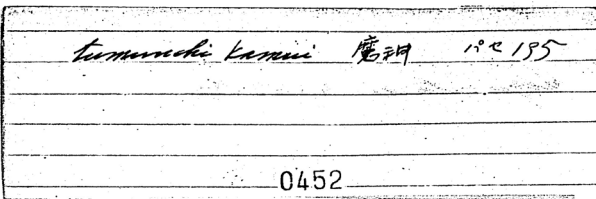
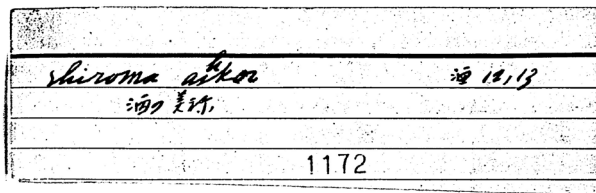
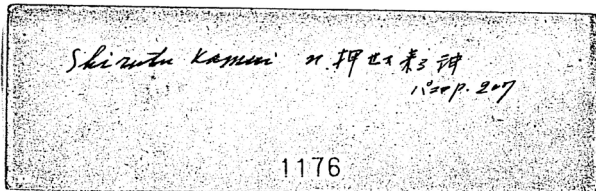
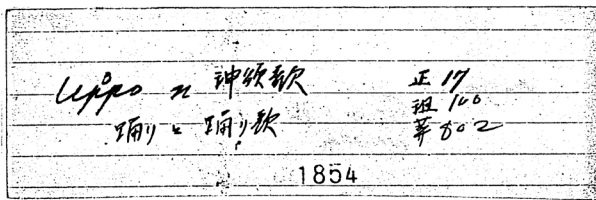
それを見ると、主な出典としては、金田一京助『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』(東洋文庫、1931年)、金田一京助『アイヌの神典—アイヌラックルの伝説』(八洲書房、1943年)、ジョン・バチェラ『蝦和英三対辞書』(北海道庁、1887年)などが確認できる。これらは、辞典稿で確認できる出典・略号と共通し、たとえば辞典稿で見られる「ユーカラ」(『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』のこと)、「B」「Bat」(『蝦和英三対辞書』のこと。著者であるジョン・バチェラ(John Batchelor)を示す略号)は語彙カードでも共通している。特に『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』にかんしては、丸括弧に数字という略号表記で表されていることが多く、これは語彙カード・辞典稿に共通する表記となっている。

ただし、辞典稿で確認できる略号が語彙カードでもすべて確認できるわけではない。

2) 辞典稿と共通しないもの

① 「文字+数字」

辞典稿には見られない出典の表記として、カードの右上、あるいは用例の最後に「葬」などの「文字+数字」が書かれているものもある。記号の種類は「パセ」「祖」(「ソ」)「酒」「葬」「パコロ」(「パコ」「パ」)「正」の6種類である(画像12~15)。



画像12～15 「文字+数字」が書かれているカード
(いずれもKD5366)

数字は、それぞれ久保寺の論文の原稿（久保寺逸彦文庫整理番号KD5155-1～10、北海道博物館収蔵資料番号:177,644～177,655）のページ数に対応しており、それぞれ「北海道二風谷コタンに於ける家系とパセオンカミ」（1953年）、「沙流アイヌの祖霊祭祀」（1952年）、「アイヌの古俗 酒の醸造及びその祭儀」（1935年）、「北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として—」（1956年）、「アイヌの瘡瘡神「パコロ・カムイ」に就いて」（1940年）、「アイヌ民族の正月の今昔」（1937年）を表している。

たとえば、KD5366-0326のカード⁽⁹⁾は

tono irenka お上の法律 祖79

とある。これは「祖」とあるとおり、「沙流アイヌの祖霊祭祀」（1952年）に記載されている祈り言葉のなかに出て来る語句・訳と完全に一致する。この irenka は

辞典稿でも「意、意図、考案、謀、指図、命令、規則、心、意向」と多様な訳が当てられているように、意味範囲が広い単語であり、適切な訳は前後の文脈に依拠する部分が多い。そのため、このカードの訳は、先にカード上で訳を作成してからそれを論文中でも使ったのではなく、論文中で前後の文脈に合わせて訳したものを、その後でカードに書き写したものと考えられる。

一方で、KD5367-1941のカードでは、「葬143」と書かれた部分だけが他とは異なる筆記具で書かれていることから、先にカードが作成され、後から論文の中で実際に用いられている個所が参照できるように「文字+数字」が書き込まれたものと考えられる。

このような「文字+数字」の出典が書かれたカードは1280項目あるが、そのほとんどは、辞典稿には反映されていない。見出し語が共通する場合でも、訳語や用例がまったく異なることから、別の出典によるものと考えられる。

②刊行物

語彙カードにおいて、出典と思しき略号が書かれているなかで、辞典稿には見られない出典として、吉田巖の著作（帯広市社会教育叢書（後に帯広叢書）、帯広市教育委員会）、『アイヌ民族誌』（第一法規出版、1969年）、秦憶丸『蝦夷生計図説』などがある。

いずれも、口承文学のテキストというよりも、民俗調査の記録をまとめたものである。

また、逆に辞典稿で出典として略号表記されている、知里真志保『アイヌ民譚集』（郷土研究社、1937年）や金田一京助『北蝦夷古謡遺篇』（甲寅叢書刊行書、1914年）などの主に口承文芸のテキストを収録した刊行物については、語彙カードにおいてその出典・略号を確認できない。

全体的な傾向として、語彙カードと辞典稿とでは、前者には民俗学に関する刊行物を出典とした項目が多く、後者は口承文芸テキストを出典とした項目が多くなっている。

(9) 以下、本稿では資料（カード）の引用にあたって、資料群のうちのどのカードにあたるかを、「KD5366-0326」のようにハイフンで区切った文字列で表す。ハイフンの前は収蔵資料番号（カード群のまとまり）であり、ハイフンの後ろの4桁数字は、各資料（カード群）におけるノンブルを示す。このノンブルは、北海道立アイヌ民族文化研究センターに本資料が寄贈された際に、同センターが資料整理の便宜のためにスタンプを捺した番号であり、久保寺が記入したものではない。また、このノンブルはカードごとではなく、カードの裏表でそれぞれ別の番号が付いている（たとえば、表が0001、裏が0002のように裏表で連番になっている）。

なお、各カードの引用にあたっては特に注記をしない限り、各カードに記入された文字列全体を記す。そのため、ここにあげたような「祖79」などの文字列が書かれていない場合は、引用者による省略ではなく、もともとカードにおいて記載されていないものと理解されたい。

5 辞典稿との関係

久保寺逸彦の辞典稿の製作過程として、

語彙カードを基本に、単語をABC順にならべて編集したものが『THE AINU-JAPANESE DICTIONARY COMPILED by I.KUBODERA』であり、B5判の大学ノートを用いて一語一語をペンとインクとで書き上げ、それを合冊製本したものである。(佐々木 2000: iv)

と述べられている。この辞典稿の「基本」となっている「語彙カード」は、すなわち本資料である。

遠藤 (2022) では、語彙カードの一部 (KD5366) と辞典稿との項目を比較し、おおよそ1) 語彙カードの内容が辞典稿に反映されている、2) 語彙カードの項目のなかには、辞典稿に反映されていないものも見られ、項目は取捨選択されている。傾向としては、信仰・宗教儀礼に関する語彙が多い。3) 記載内容についても語彙カードと辞典稿とで違いが見られる、と整理した。

以下では、その後の資料整理の結果も含めて、語彙カードについて、その内容が辞典稿の記述にどの程度反映されているか/いないのかを総合的に記述する。

① 語彙カードと辞典稿が完全一致

語彙カードと辞典稿本とで、見出し語及び和訳・用例が一致する項目は、語彙カードのおおよそ25%に及ぶ。こうした項目の特徴は、語彙カードを辞典稿にそのまま書き写したと言っていいほど、内容が完全に一致することである。ひらがな/カタカナの違いや、送り仮名の相違など、用字の違いこそ見られるものの、内容・表現を修正・校正しているような跡は見られない。

たとえば、KD5366-2828にある、

chashnatara さわやかなり
 asampe-pa wa, asampe-kesh wa
生きかへる微風のやうに
 koshituriri, itemka mau ne
 aekeutum, chashnatara.

という項目は、このまま辞典稿でも和訳・用例を含めて同じ内容となっている。

なお、語彙カードのなかには、項目全体が斜線で消されているカードがある⁽¹⁰⁾。

この斜線が何を意味しているのかは不明だが、斜線が引かれたカードについては、同じ内容の項目が辞典稿にも見られる。そして、その内容は和訳・用例を含めて完全に一致していることから、辞典稿などに反映させ終えたといったようなことを意味するものと推測できる。

② 語彙カードと辞典稿で一部が一致

語彙カードのなかには、同じ語彙が複数のカードに書かれている場合がある。それらの多くは辞典稿に反映されるにあたって、内容が統合されていることが多い。

たとえば、upaknoという単語は辞典稿では、

同じ程. 何れ劣らぬ. 相匹敵する / 丁度対当する

という4つの訳語が当てられている。語彙カードでは、upaknoは2枚のカードに書かれているが、それぞれ、

upakno 同じ程 (KD5365-0825)

u-pak-no 何れ劣らぬ、相匹敵スル 丁度 対当スル (KD5365-0823)

という訳語がそれぞれ書かれている。辞典稿の4つの訳語は、この2枚のカードの訳語を統合した形となっている。さらに3枚以上のカードが統合されている場合もあり、辞典稿のyairarireはKD5367の2987, 2989, 2991, 2995, 2997に書かれている訳語・用例が統合されている。

また、語彙カードのなかには、見出し語はなく、用例のみが書かれているカードもある。こうした用例のみが書かれているカードは、辞典稿にあっては、見出し語・和訳が書かれているカードと統合されている場合が多い。

③ 語彙カードと辞典稿で和訳・用例が異なる

語彙カードと辞典稿とで項目が一致しても、和訳や用例がまったく異なる場合もある。たとえば、辞典稿ではatomteという項目のなかに派生語としてatomte itakがあるが、その和訳は、

美辞麗句. 美称 / 美しく飾つていふ言葉

である。一方の語彙カードでは、2枚のカードに同じ語句が見られるが、それぞれ、

atomte itak かざり言葉、詩語 (KD5367-3101)

(10) 中には消している線が赤線になっているカードもある。

a-tomte itak 雅語. (KD5367-2213)

という異なる訳語になっている。そのため、辞典稿における和訳は語彙カードではなく、別の出典から引いてきたと考えられる。したがって、語彙カードの内容がすべて辞典稿に反映されているわけではないと言える。

④ 辞典稿に反映されていない項目

前項でみたように、語彙カードの内容がすべて辞典稿に反映されているわけではないため、語彙カードのなかには、辞典稿の見出しや用例にはない語彙も散見される。

たとえば、語彙カードには

chirai-apapo フクジュ草 / (美幌、屈斜路
(KD5367-2507)

Nai-kor kamui 沢の神 / petorun kamui の配下
(KD5367-0375)

のような項目があるが、これは辞典稿には見出し語・用例(派生語)としての記載がない語彙である。

辞典稿に反映されていない項目としては、上記のような地域名が並記された方言や、信仰・宗教儀礼に関する語彙が目立つ。たとえば地域名が併記されている方言としては324項目あるが、そのうちの半数以上に当たる171項目が辞典稿には反映されていない。ただし、方言のなかでも樺太の方言は辞典稿にも多く反映されており、語彙カードもしくは辞典稿に、樺太や樺太の地名(多蘭泊、智来、白浦などの略称)が記載されている98項目のうち、辞典に記載がないのは9項目のみである。

もうひとつの信仰・宗教儀礼に関する語彙には、カムイの名称やイナウの種類、儀礼の種類(pase onkamiなど)などがある。「はじめに」で記したとおり、語彙カードのうち「宗教儀礼語彙」(KD5365)は、久保寺が記した箱書きによる資料名であるが、実際に語彙カードに記載されている項目・内容を見る限りにおいては、このKD5365は他の2件の語彙カードよりも突出して信仰・宗教儀礼に関する語彙が多く含まれているわけではなく、その他の2件の資料群にも万遍なく含まれている。

上記のほか、「eraman v 知ル、ワカル、サトル / - an」(KD5365-0483)のような基礎的な語彙のなかにも、語彙カードには記載されているものの、辞典稿では見出し語として立てられていないものがある。

また、前述のとおり、語彙以外にも民俗調査のメモや文献メモなどのカードも散見されるが、このようなカードの内容は辞典稿には反映されていない。

⑤ 3件の語彙カードにおける相違と特徴

ここまでに見たような辞典稿に含まれる語彙との関係について、3件の語彙カードにおいて、それぞれの資料(群)ごとに数えると、表2ようになる。

表における縦軸は、それぞれ前述の「①語彙カードと辞典稿で一部が一致」「②語彙カードと辞典稿で一部が一致」「③語彙カードと辞典稿で和訳・用例が異なる」「④辞典稿に反映されていない項目」と同じである。また、「判読不能」はインクのにじみなどのために、カード内容が判読できなかった項目である。

辞典稿との語彙の重なり比率について、3件の資料群を並べてみると、それぞれに大きな差異が認められないことがわかる。「[アイヌ語の語彙カード1]」

表2 各資料(語彙カード)における語彙と、辞典稿の語彙との関係

	「宗教儀礼語彙」 (KD5365)	「[アイヌ語の語彙カード1]」 (KD5366)	「[アイヌ語の語彙カード2]」 (KD5367)	語彙カード全体 (KD5365~67)
①完全一致	722項目 (27.2%)	592項目 (25.3%)	680項目 (25.4%)	1,994項目 (26.0%)
②一部が一致	725項目 (27.3%)	740項目 (31.7%)	765項目 (28.5%)	2,230項目 (29.1%)
③和訳・用例が異なる	272項目 (10.2%)	291項目 (12.4%)	314項目 (11.7%)	877項目 (11.4%)
④反映なし	930項目 (35.0%)	713項目 (30.5%)	920項目 (34.3%)	2,563項目 (33.4%)
判読不能	7項目 (0.3%)	2項目 (0.1%)	3項目 (0.1%)	12項目 (0.2%)
項目合計	2,656項目	2,338項目	2,682項目	7,676項目

(KD5366) が他の2件に比して、若干「④辞典稿に反映されていない項目」が少なく、その分「②語彙カードと辞典稿で一部が一致」している項目が多いが、5%以内の差異に収まっていることから、有意な差異があると位置づけるのは難しい。

大きな差異が見られないことから、それぞれの資料(群)を別の用途のために使い分けていたというよりも、3件全体でひとつのまとまりと考えるほうが自然である。

このように3件の語彙カードが全体としてひとつのまとまりだと考えられる特徴は、他にも見られる。

それは、ひとつの項目が長い記述になるために2枚に分割されたカードの場所である。前述(2 資料の体裁)のとおり、内容が2枚に分割されたカードがしばしば存在するが、この2枚のカードは別々の資料群に収められていることもある。たとえば、「ear sone no」という項目は、辞典稿と語彙カードとで同一の内容で確認できるが、語彙カードでは、

一枚ノ inau so ノ上ニタダ一人坐ルコト / pon ainu
ponkur, iyoikiri

という前半と、この用例の続きにあたる

- kotcha ta, -, kaparpe tuki, kaparpe otchike,
yaipekar oka ruwe-ne.

は、それぞれKD5367-1826とKD5365-0313に書かれている。この他にも、「echikayanu」という項目がKD5365-0194とKD5366-0692とに分割して書かれているなど、資料群(すなわち収められていた箱)に関係なく、カードが収められている。

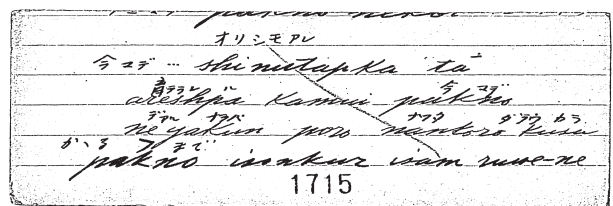
これらのことから、それぞれの資料群については、久保寺が箱書きをした当初段階では「宗教儀礼語彙」といったカテゴリーによって分類されていた可能性もあるが、少なくとも現存する3件の資料群においては、同一の項目が別の資料群に含まれていることから見て取れるように、いわばシャッフルされている状態であり、カテゴリーや辞典稿との関係において、大きな違いは見られない。

さらに、久保寺逸彦による語彙カードは、本稿で取り上げている3件(全4,799枚)の他にも作られていたことが推測できる。それは、長い項目が2枚に分割されているカードの中には、片割れにあたるカードが見当たらないものもあるためである。

ないものもあるためである。

たとえば、KD5365-1715は、辞典稿との対応から、pak (no) という項目の後半にあたるカードであることがわかる(画像16)。断面にあたる上辺で行が途中で分割されていることから、前半にあたるカードが作られていたことは確実だが、現存する3件の語彙カードのなかには、それに該当するカードは見当たらない。

このカード以外にもいくつか、作成されていたはずのもう半分のカードが見当たらない例はあるが、これは久保寺の研究スタイルが影響しているのだろうと推測できる。久保寺逸彦文庫の文書資料を見ると、フィールドノートや草稿・メモ等がほとんど遺されていない。口承文芸のテキストもアイヌ語・和訳ともに完成原稿に近いと思われる状態のものがほとんどで、校正の跡などが見られるものがほとんどない。テキストを整える過程で作成した下書き等は手元に残さず破棄したものと推測される。語彙カードについても同様に、遺されている3件以外にも、少なくとも枚数のカードが作られていたであろうが、辞典稿などに反映するなどして整理を終えたカードのなかには、メモや草稿と同様に、手元に遺さなかったものも少なからずあったのだろうと推測できる。



画像16 pak (no) の項目のうちの後半 (KD5365-1715)

6 まとめ — 語彙カードの特徴

語彙カードと辞典稿とは、項目や内容が一致するものも多くあり、語彙カードが辞典稿のもとになっている資料であることは、確実である。

ただし、語彙カードがそのまま辞典稿に丸写しされているわけではなく、各カードの項目の取捨選択、和訳や用例などの統合や整理を経て、辞典稿がまとめられた様子もうかがえる。こうした取捨選択の過程では、特に信仰・宗教儀礼に関する語彙が多く省かれている。これは、辞典稿自体が口承文芸(特に韻文)を読むための語彙集であるために、それらに関する語彙を優先的に選択したためだと推測できる。

一方で、語彙カードには、辞典稿に反映されていない語彙として、信仰・宗教儀礼に関する文献等から引き写した語彙のほか、基礎語彙を含めた日常語彙が確認できる。さらには必ずしも語彙だけではなく、信仰や宗教儀

札に関するメモのようなものも散見されることも特徴である。

このような語彙・項目の違いは、それぞれの資料が作成された目的・用途の違いによるものと推測できる。辞典稿が口承文芸を読むための語彙集であることに対し、語彙カードがどのような意図をもってまとめられたかということを示す資料はないようだが、語彙カードの内容を見て行くと、口承文芸に留まらず、広くアイヌ語・アイヌ文化における語彙やメモなどをピックアップし、整理するためにまとめられたものだろうと考えられる。

引用文献

- 遠藤志保 2022. 2021年度新収蔵資料の紹介 1 一山田秀三年賀状アルバム及び久保寺逸彦によるアイヌ語辞典一. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 7: 73-108. 北海道博物館.
- 切替英雄・佐藤知己・奥田統己 2020. 凡例にかえて. (久保寺逸彦. 2020. 久保寺逸彦著作集4 アイヌ語・日本語辞典稿. 草風館. 所収)
- 久保寺逸彦 2020. 久保寺逸彦著作集4 アイヌ語・日本語辞典稿. 草風館.
- 佐々木利和 2020. 『久保寺逸彦著作集4 アイヌ語・日本語辞典稿』の刊行に寄せて. (久保寺逸彦 2020. 久保寺逸彦著作集4 アイヌ語・日本語辞典稿. 草風館. 所収)
- 北海道立アイヌ民族文化研究センター (編) 2001. 北海道立アイヌ民族文化研究センター資料目録5 久保寺逸彦文庫文書資料・写真資料目録. 北海道立アイヌ民族文化研究センター.

Material Introduction: Ainu Vocabulary Cards by KUBODERA Itsuhiko

ENDO Shiho

This paper introduces the outline and characteristics of Ainu vocabulary cards from the Hokkaido Museum's collection of materials related

to the Ainu language, which were handwritten by KUBODERA Itsuhiko (1902–1971), a distinguished scholar of Ainu culture.